

バスの中でお昼ご飯を食べながら、同行してくれた沖縄タイムスの記者のお話を聞き、宜野湾市にある普天間航空基地を視察するために嘉数高台公園に登りました。

沖縄には在日米軍の50%以上にあたる2万3000人弱の海兵隊員が駐留しています。沖縄は日本の0.6%の土地面積しかありませんが、在日米軍の常時利用面積の73.88%が沖縄にあるのです。超過密であり、沖縄の人たちが皮膚感覚で基地を感じるというのは当然でしょう。



その中でも世界で最も危険な飛行場と言われている普天間飛行場は、宜野湾市の中心に、住宅地に隣接して作られています。2700mの滑走路を備え、兵員、物資の輸送を担っています。市街地を低空で飛んで離着陸するのですから、住民は、騒音はもとより、墜落などの危険性と隣り合って暮らしています。

高台から眺めた普天間基地にはオスプレイが並んで駐機していました。オスプレイはヘリのように垂直離着陸し、飛行機のように水平高速飛行し、行動半径は1000キロを超える最新鋭輸送機と言われていますが、システムは複雑、操縦は技術を要し、安定性がなく、未亡人製造機と呼ばれているほど、事故をおこしています。これが

2012年から配備され、現在24機態勢で、騒音規制や飛行ルートを超える違法な運用がされています。以前沖縄国際大学に墜落事故がありました。消防が消火をしたものの、警察の事故調査は許されませんでした。又吉さんが「米軍をフェンスで囲んでいるのではなく、日本人がフェンスに囲われているのです」と無念そうに言われた通りです。沖縄タイムスの記者は、怒りと苦しみを抑えられないような顔をしながら説明をされました。



その後、普天間の移設先に政府が建設を開始した物資、弾薬補給基地であるキャンプ・シュワブの辺野古に向かいました。辺野古の美しい浜辺では、名護市の市民投票で、「海上ヘリ基地建設反対」が同意され、「平和と名護市政



主化を求める協議会」による、海上基地建設阻止のために見張りのテントが立てられ、4198日目(11年を越す)の海上における阻止行動、監視のための「座り込み」が行われていました。安次富氏がアピールされました。「私たちは基地との共同生活は出来ない！沖縄に人権はないのか？」私たちもテントの下に座り、短時間でしたが、阻止運動に参加しました。



また、キャンプの正門前で、建設工事に抗議し、工事用の資材搬入を阻止するための、「24時間監視の座り込み」のテントに行きました。467日目でした。ここでは島ぐるみ会議の代表の一人である高里氏があくまでも非暴力によって阻止するとアピール



されました。沢山の横断幕が基地のフェンスに取り付けられていました。多くの賛同者が心を寄せていることを感じます。そこでも私たちは夕方まで、阻止運動に参加することが出来ました。